

世界の靴物語 ③

文・画 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原一郎

カナダ *moccasin* モカシン

モカシンとは北米大陸、カナダ東部の先住民の一部族で使われた言葉といわれている。ムース（へら鹿）などの革を用いて足を裏から包み、爪先にひだを寄せ側面に穴を開けて甲の部分と綴り合わせて袋状にした履物である。

これは柔軟で足によくフィットして大地の感触が直に伝わり、川を渡っても水捌けのよいものである。

カナダや北アメリカの先住民は、ビーズ刺繍やフリンジ（房飾り）によって部族を現していた。

このような袋状の履物は、古くから北欧やアジアをはじめ世界各地で用いられていた。

現代のモカシン靴は、ノルウェーの漁夫の間で用いられていた袋縫いの履物が1930年代にアメリカに伝わり、甲にベルトの付いたスリッポン（ローファー・シューズ）や、紐付のモカシンもつくられ、ゴルフ靴にもとり入れられてアメリカン・スタイルに定着した。

モカシンの種類は、先住民が作ったような底から一枚の革で包み込んで甲をU字型に縫い合わせた本格的なモカシン（トゥルー・モカシン）と、外観だけはモカシンにみえる乗せモカシンや、内モカシン、返しモカシン、ミシン飾りのモカシンなどがある。

日本で「Uチップ」というのは和製の靴

用語である。近年はカジュアルなもので、スーツにも履いてビジネスに用いられたり、リゾート用や、婦人のパンプス型のものもつくられている。

フランス *espadrille* エスパドリーユ

エスパドリーユはフランスの民族的な履物で、甲はキャンバス地で爪先部分と後部を両側面で縫い合わせたシンプルなデザインである。底はジュート麻の紐をうず巻き状につなぎ合わせたロープ・ソールで、水に強く、濡れた岩の上でもすべらないことから海浜でも用いられた。同様のものが、スペインではアルパルハータ（alpargata）といわれて、足首に巻きつける紐の付いたものや、サンダル風のものもある。

1930年代アメリカで避暑地で履かれてリゾート・シューズの基本型となった。

1960年代にはパリモードにとり入れられ、中ヒールのウエッジがつけられカラフルな甲材を用いたオリジナルデザインが打出された。'70年代から'80年代の初めには日本でブランド物の婦人靴がつけられ、「ジュート巻き」として大流行した。

moccasin

モカシン



カナダ

espadrille

エスパドリーユ



フランス